

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office

出願年月日

Date of Application: 2000年 9月 5日

出願番号

Application Number: 特願2000-269349

[ST.10/C]: [JP2000-269349]

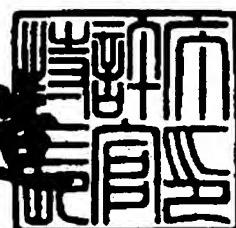
出願人

Applicant(s): 協和醸酵工業株式会社

2002年 3月 2日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

及川耕三



【書類名】特許願

【整理番号】H12-1669K5

【提出日】平成12年 9月 5日

【あて先】特許庁長官殿

【国際特許分類】

A61K 7/00

【発明者】

【住所又は居所】茨城県つくば市御幸が丘2番地 協和醸酵工業株式会社 筑波研究所内

【氏名】小林 麻子

【発明者】

【住所又は居所】茨城県つくば市御幸が丘2番地 協和醸酵工業株式会社 筑波研究所内

【氏名】高橋 知也

【発明者】

【住所又は居所】東京都千代田区大手町一丁目6番1号 協和醸酵工業株式会社 本社内

【氏名】竹越 与一郎

【特許出願人】

【識別番号】000001029

【氏名又は名称】協和醸酵工業株式会社

【代表者】平田 正

【先の出願に基づく優先権の主張】

【出願番号】平成12年特許願第218184号

【出願日】平成12年 7月19日

【手数料の表示】

【予納台帳番号】008187

【納付金額】21,000

【提出物件の目録】

【物件名】明細書 1

【物件名】要約書 1

【ブルーフの要否】要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 セラミド合成促進剤

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を有効成分として含有する皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【請求項 2】 ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を全重量に対し0.01～20重量%含有することを特徴とする、請求項1記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【請求項 3】 ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体が、N-アセチル化誘導体、N-プロピオニル化誘導体、N-ブチリル化誘導体またはイソブチリル化誘導体である、請求項1または2記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【請求項 4】 ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、シス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-3-ヒドロキシ-L-プロリンおよびトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリンからなる群より選ばれるヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体である、請求項1～3いずれかに記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【請求項 5】 ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、微生物により生産されたものである、請求項1～4いずれかに記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【請求項 6】 微生物が、アミコラトプシス属、ダクチロスボランジウム属およびストレプトマイセス属から選ばれる属に属する微生物由来のプロリン3位水酸化酵素遺伝子またはプロリン4位水酸化酵素遺伝子を導入された微生物である、請求項5記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【請求項 7】 ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を有効成分として含有する皮膚表皮バリアー機能改善

剤。

【請求項8】 ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を全重量に対し0.01~20重量%含有することを特徴とする、請求項7記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【請求項9】 ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体が、N-アセチル化誘導体、N-プロピオニル化誘導体、N-ブチリル化誘導体またはイソブチリル化誘導体である、請求項7または8記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【請求項10】 ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、シス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-3-ヒドロキシ-L-プロリンおよびトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリンからなる群より選ばれるヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体である、請求項7~9いずれかに記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【請求項11】 ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、微生物により生産されたものである、請求項7~10いずれかに記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【請求項12】 微生物が、アミコラトブシス属、ダクチロスボランジウム属およびストレブトマイセス属から選ばれる属に属する微生物由来のプロリン3位水酸化酵素遺伝子またはプロリン4位水酸化酵素遺伝子を導入された微生物である、請求項11記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【請求項13】 ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を有効成分として含有するアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【請求項14】 ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を全重量に対し0.01~20重量%含有することを特徴とする、請求項13記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【請求項15】 ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体が、N-アセチル

化誘導体、N-プロピオニル化誘導体、N-ブチリル化誘導体またはイソブチリル化誘導体である、請求項13または14記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【請求項16】 ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、シス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-3-ヒドロキシ-L-プロリンおよびトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリンからなる群より選ばれるヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体である、請求項13～15いずれかに記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【請求項17】 ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、微生物により生産されたものである、請求項13～16いずれかに記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【請求項18】 微生物が、アミコラトブシス属、ダクチロスボランジウム属およびストレプトマイセス属から選ばれる属に属する微生物由来のプロリン3位水酸化酵素遺伝子またはプロリン4位水酸化酵素遺伝子を導入された微生物である、請求項17記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【請求項19】 請求項1～6のいずれかに記載のセラミド合成促進剤を含有する、皮膚バリアー機能改善またはアトピー性皮膚炎の改善のための化粧料。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、セラミド合成促進剤および該セラミド合成促進剤を配合した化粧料に関する。

【0002】

【従来の技術】

皮膚は常に様々な外部環境からの刺激にさらされている。皮膚の角質層にはこれら外界からの刺激や異物の侵入を防いだり、体内の水分の蒸散を防ぐバリアー

機能が備わっている。バリアー機能の低下している人や動物では、皮膚角質層中のセラミド量が低下していることが知られている [ジャーナル・オブ・リビッド・リサーチ (Journal of Lipid Research), 30, 89 (1989)]。また、バリアー機能低下の認められるアトピー性皮膚炎患者もセラミド量が減少していることが報告されている [アクタ・デルマト・ヴェネレオロジカ (Acta Dermato venereologica), 78, 27 (1998)]。

【0003】

従来、バリアー機能を改善する手段として、セラミドの外用が検討され、その有効性が確認されている [フレグランスジャーナル, 10, 29 (1999)]。また、セラミドの大量入手が容易でないことから、最近では皮膚のセラミド産生を高める物質の探索が行われてきている。

【0004】

皮膚セラミドには種々の種類があることが知られている [ジャーナル・オブ・リビッド・リサーチ, 24, 559 (1983)]。各セラミドは特定の生理作用を有していることが知られている。特にセラミド1は角質細胞間脂質を安定に保持することにより水分蒸散量を調節し、セラミド2は皮膚の水分保持機能に寄与していることが報告されている [フレグランスジャーナル, 10, 65 (1999)]。

【0005】

セラミドの生合成を促進するものとしては、ユーカリエキス [第24回日本研究皮膚科学会学術大会 (1999)]、ニコチン酸 [特開平8-217658号公報]、N-アセチル-L-システイン [特開平7-291851号公報]、酵母エキス [特開平9-2952号公報]、乳酸 [アーチベス・オブ・デルマトロジカル・リサーチ (Archives of Dermatological Research), 383-390, 288 (1996)] 等が報告されている。

【0006】

しかし、これまでに、ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体による皮膚表皮セラミド合成促進作用については知られていない。

【0007】

【発明が解決しようとする課題】

本発明の目的は、皮膚表皮角質層におけるセラミド合成を促進し、皮膚バリアー機能を改善し、荒れ肌改善やアトピー性皮膚炎などの皮膚疾患の予防または改善に効果を有する安全なセラミド合成促進剤および該セラミド合成促進剤を含有する化粧料を提供することにある。

【0008】

【課題を解決するための手段】

本発明者らは、皮膚表皮角質層におけるセラミド合成を促進させることに關し、銳意検討した結果、ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩に皮膚表皮角質層におけるセラミド合成促進効果を見出し本発明を完成するに至った。

【0009】

即ち、本発明は以下(1)～(19)に関する。

(1) ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を有効成分として含有する皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【0010】

(2) ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を全重量に対し0.01～20重量%含有することを特徴とする、前記(1)記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【0011】

(3) ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体が、N-アセチル化誘導体、N-プロピオニル化誘導体、N-ブチリル化誘導体またはイソブチリル化誘導体である、前記(1)または(2)記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【0012】

(4) ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、シス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-3-ヒドロキシ-L-プロリンおよびトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリンからなる群より選ばれるヒ

ドロキシプロリンのN-アシル誘導体である、前記(1)～(3)いずれかに記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【0013】

(5) ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、微生物により生産されたものである、前記(1)～(4)いずれかに記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【0014】

(6) 微生物が、アミコラトブシス属、ダクチロスボランジウム属およびストレプトマイセス属から選ばれる属に属する微生物由来のプロリン3位水酸化酵素遺伝子またはプロリン4位水酸化酵素遺伝子を導入された微生物である、前記(5)記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【0015】

(7) ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を有効成分として含有する皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【0016】

(8) ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を全重量に対し0.01～20重量%含有することを特徴とする、前記(7)記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【0017】

(9) ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体が、N-アセチル化誘導体、N-プロピオニル化誘導体、N-ブチリル化誘導体またはイソブチリル化誘導体である、前記(7)または(8)記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【0018】

(10) ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、シス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-3-ヒドロキシ-L-プロリンおよびトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリンからなる群より選ばれる

ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体である、前記(7)～(9)いずれかに記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【0019】

(11) ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、微生物により生産されたものである、前記(7)～(10)いずれかに記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【0020】

(12) 微生物が、アミコラトプシス属、ダクチロスボランジウム属およびストレブトマイセス属から選ばれる属に属する微生物由来のプロリン3位水酸化酵素遺伝子またはプロリン4位水酸化酵素遺伝子を導入された微生物である、前記(11)記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【0021】

(13) ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を有効成分として含有するアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【0022】

(14) ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を全重量に対し0.01～20重量%含有することを特徴とする、前記(13)記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【0023】

(15) ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体が、N-アセチル化誘導体、N-プロピオニル化誘導体、N-ブチリル化誘導体またはイソブチリル化誘導体である、前記(13)または(14)記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【0024】

(16) ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、シス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、

トランスー4—ヒドロキシ—D—プロリン、トランスー3—ヒドロキシ—L—プロリンおよびトランスー3—ヒドロキシ—D—プロリンからなる群より選ばれるヒドロキシプロリンのN—アシル誘導体である、前記(13)～(15)いずれかに記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【0025】

(17) ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN—アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、微生物により生産されたものである、前記(13)～(16)いずれかに記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【0026】

(18) 微生物が、アミコラトブシス属、ダクチロスボランジウム属およびストレプトマイセス属から選ばれる属に属する微生物由来のプロリン3位水酸化酵素遺伝子またはプロリン4位水酸化酵素遺伝子を導入された微生物である、前記(17)記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【0027】

(19) 前記(1)～(6)のいずれかに記載のセラミド合成促進剤を含有する、皮膚バリアー機能改善またはアトピー性皮膚炎の改善のための化粧料。

【0028】

【発明の実施の形態】

本発明に使用するヒドロキシプロリンは、プロリンがD体かL体か、また水酸基の位置が3位か4位か、およびその立体異性体がシスかトランスかによって、8種類の立体異性体があるが、いずれでも用いうる。

【0029】

ヒドロキシプロリンとしてはの具体例としては、例えばシスー4—ヒドロキシ—L—プロリン、シスー4—ヒドロキシ—D—プロリン、シスー3—ヒドロキシ—L—プロリン、シスー3—ヒドロキシ—D—プロリン、トランスー4—ヒドロキシ—L—プロリン、トランスー4—ヒドロキシ—D—プロリン、トランスー3—ヒドロキシ—L—プロリンおよびトランスー3—ヒドロキシ—D—プロリンがあげられる。

【0030】

ヒドロキシプロリンは、コラーゲン中の主要構成アミノ酸成分として、また、エラスチンの構成アミノ酸として自然界に広く存在するアミノ酸の一種であり、例えはブタやウシ等の動物由来のコラーゲンを酸加水分解し、常法により精製することにより製造することができる。

【0031】

トランスー4-ヒドロキシ-L-プロリンは、アミコラトブシス (Amycolatopsis) 属またはダクチロスボランジウム (Dactylosporangium) 属より単離したプロリン4位水酸化酵素（特開平7-313179号公報）を用い製造することができる。またシスー3-ヒドロキシ-L-プロリンは、ストレプトマイセス (Streptomyces) 属より単離したプロリン3位水酸化酵素（特開平7-322885号公報）を用い製造することができる【バイオインダストリー, 14, 31 (1997)】。

【0032】

具体的には、上記微生物由来のプロリン3位水酸化酵素またはプロリン4位水酸化酵素をコードする遺伝子を適当なベクターに挿入して組換えベクターを作製し、当該組換えベクターを宿主とする微生物に導入し、当該微生物を培養することによりヒドロキシプロリンを製造することができる。

本発明においては、微生物を用いて製造したヒドロキシプロリンがより品質の優れたものが容易に得られる点で好ましい。

【0033】

本発明で用いるヒドロキシプロリンのN-アシリル誘導体としては、上述の各種ヒドロキシプロリンの立体異性体のN-アシリル誘導体があげられる。該N-アシリル誘導体のアシリル基としては、特に制限がないが、好ましくは炭素数1～24、より好ましくは炭素数1～12、特に好ましくは炭素数1～6のアシリル基があげられ、具体的には、例えはホルミル、アセチル、プロピオニル、ブチリル、イソブチリル、バレリル、ピバロイル、ヘキサノイル、ヘプタノイル、オクタノイル、ノナノイル、デカノイル、ウンデカノイル、ドデカノイル等をあげることができ、アセチル、プロピオニル、ブチリル、イソブチリルが好ましい。

【0034】

ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体の塩としては、ナトリウム、カリウム、リチウム等のアルカリ金属塩、カルシウム、マグネシウム等のアルカリ土類金属塩、アンモニウム塩、モノエタノールアミン、ジエタノールアミン、トリエタノールアミン、トリイソプロパノールアミンなどのアミンの付加塩およびアルギニン、リジン等の塩基性アミノ酸の付加塩などがあげられる。

【0035】

ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体は、公知の方法により調製することができる。例えは、ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体は、直鎖または分岐状の炭素数1～24の飽和または不飽和の脂肪酸を塩化チオニル、ホスゲン等のハロゲン化剤を用いてクロライド、プロマイド等のハロゲン化物に変換した後、前述のヒドロキシプロリンと縮合させるか、または脂肪酸を酸無水物に変換した後、ヒドロキシプロリンと反応させることにより製造することができる。

【0036】

脂肪酸としては、例えはギ酸、酢酸、プロピオン酸、酪酸、イソ酪酸、吉草酸、イソ吉草酸、ビバル酸、ヘキサン酸、ヘプタン酸、オクタン酸、ノナン酸、デカン酸、ウンデカン酸、ドデカン酸等の脂肪酸を単独もしくは組合せたものが用いられる。

【0037】

酸ハロゲン化物を経由するヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体の製造方法を、以下に例示する。

【0038】

脂肪酸を塩化メチレン、クロロホルム、四塩化炭素、ベンゼン、トルエン、キシレン、n-ヘキサン等の溶媒中に分散し、これに1～5倍当量のハロゲン化剤を添加して反応させ、脂肪酸ハライドを得る。次に、ヒドロキシプロリンを溶媒に溶解または分散させ、得られた溶液を5～70℃に保ちながら、上記の脂肪酸ハライドをヒドロキシプロリンに対して0.3～3.0倍当量加え、アシル化反応を行うことによりヒドロキシプロリンのN-アシル化誘導体を製造することができる。

【0039】

アシル化反応に用いられる溶媒としては、水、メタノール、エタノール、イソプロパノール、イソブタノール、アセトン、トルエン、テトラヒドロフラン、酢酸エチル、N,N-ジメチルホルムアミド、ジメチルスルホキシド等があげられ、これらは単独あるいは混合して用いてもよい。ヒドロキシプロリンを溶媒に溶解または分散する際、ヒドロキシプロリンに対して0.8~2.0倍当量の水酸化ナトリウム、水酸化カリウム等のアルカリ物質を必要に応じて溶媒に溶解または分散させてもよい。

【0040】

ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体の塩を取得したいとき、ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体が塩の形で得られる場合には、そのまま精製すればよく、遊離の形で得られる場合には、適当な溶媒に溶解または懸濁し、塩基を加えて塩を形成させればよい。

精製は、例えは結晶化、クロマトグラフィー等の通常の方法が用いられる。

【0041】

具体的なヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体としては、例えは、N-アセチルシス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、N-アセチルシス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、N-アセチルシス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、N-アセチルシス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、N-アセチルトランス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、N-アセチルトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、N-プロピオニルシス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、N-プロピオニルシス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、N-プロピオニルシス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、N-プロピオニルトランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、N-プロピオニルトランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、N-プロピオニルトランス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、N-プロピオニルトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、N-ブチリルシス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、N-ブチリルシス-4-ヒドロキシ-D-プロリン

シ－D－プロリン、N－ブチリル－シス－3－ヒドロキシ－L－プロリン、N－ブチリル－シス－3－ヒドロキシ－D－プロリン、N－ブチリル－トランス－4－ヒドロキシ－L－プロリン、N－ブチリル－トランス－4－ヒドロキシ－D－プロリン、N－ブチリル－トランス－3－ヒドロキシ－L－プロリン、N－ブチリル－トランス－3－ヒドロキシ－D－プロリン、N－イソブチリル－シス－4－ヒドロキシ－L－プロリン、N－イソブチリル－シス－4－ヒドロキシ－L－プロリン、N－イソブチリル－シス－3－ヒドロキシ－L－プロリン、N－イソブチリル－シス－3－ヒドロキシ－D－プロリン、N－イソブチリル－トランス－4－ヒドロキシ－L－プロリン、N－イソブチリル－トランス－4－ヒドロキシ－D－プロリン、N－イソブチリル－トランス－3－ヒドロキシ－L－プロリン、N－イソブチリル－トランス－3－ヒドロキシ－D－プロリン等をあげることができる。

【0042】

本発明の皮膚表皮セラミド合成促進剤において、ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN－アシル誘導体またはそれらの塩は、シス／トランス－4－ヒドロキシ－L／D－プロリン、シス／トランス－3－ヒドロキシ－L／D－プロリン、もしくはこれらの種々のN－アシル誘導体またはその塩を、単独または混合して用いることができる。

【0043】

皮膚表皮セラミド合成促進剤中のヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN－アシル誘導体またはそれらの塩の含有量は目的とする効果に応じて増減させることができ、例えば、0.001～50重量%、好ましくは0.01～20重量%、特に好ましくは0.1～10重量%である。

【0044】

本発明において、セラミドとは、N－アシルスフィンゴシン誘導体を意味し、例えばジャーナル・オブ・リピッド・リサーチ、24、559(1983)の図2に記載された化合物等をあげることができる。

【0045】

本発明を適用できる皮膚表皮としては、特に制限がないが例えはマウス、イヌ

、ネコ、ウマ等の愛玩動物等及びヒトの皮膚表皮が例示でき、ヒト皮膚表皮が好ましい。

【0046】

皮膚表皮のセラミドは、表皮脂質を例えれば95%エタノールで抽出し、これをさらにヘキサン：メタノール（2：3）で抽出し乾固させて取得し、得られた表皮脂質をクロロホルムに溶解し、芋川ら【ジャーナル・オブ・インヴェスティゲイティブ・ダーマトロジー（Journal of Investigative Dermatology），96, 523 (1991)】方法に準じて、シリカゲル薄層クロマトグラフィーにて分離後、フランクスボットスキャニングデンシトメーター（島津製作所社製、CS-9000）で測定することができる。

【0047】

本発明の皮膚表皮セラミド合成促進剤は、上記必須成分に加え、適宜、各用途に適した添加剤、例えは、医薬担体や通常化粧料に配合される成分等を含有させることにより化粧品や医薬品等の用途に使用することができる。

【0048】

本発明の皮膚表皮セラミド合成促進剤の化粧品および医薬品の形態の例としては、以下に例を挙げて説明するが、これに限定されるものではない。

【0049】

本発明の化粧品の形態としては、液状製品、ゲル状製品、乳液状製品、クリーム等の固形状製品をあげることができ、例えは、化粧水、乳液、美容液、ジェル、パック、モイスチャークリーム、コールドクリーム、マッサージクリーム、アフターシェービングクリーム、ハンドクリーム、日焼け止めクリーム、クレンジングクリーム、ボディーローション、ボディシャンプー、ヘアシャンプー、洗顔クリーム、洗顔フォーム、クレンジングクリーム、クレンジングミルク、クレンジングローション、マッサージクリーム、日焼け止めクリーム、日焼け用オイル、ヘアリンス、ヘアトリートメント、養毛料、育毛料、チック、ヘアクリーム、ヘアリキッド、セットローション、ヘアスプレー、ヘアダイ、ヘアブリーチ、カラーリンス、カラースプレー、バーマネットウェーブ液、プレスパウダー、ルースパウダー、アイシャドー、ハンドクリーム等があげられる。

【0050】

本発明の化粧品は、ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩に、化粧品に使用される一般的な原料、例えば、固体油・半固体油、液体油、保湿剤、エモリエント剤、水溶性高分子、油溶性高分子、各種界面活性剤、シリコーンまたはフッ素化合物で処理されていてもよい無機および有機顔料、エタノール、紫外線吸収剤、防腐剤、pH調整剤、皮膚柔軟剤、水等を含有させることができ、本発明の目的、効果を損なわない質的、量的範囲内で含有可能である。

【0051】

固体・半固体油としては、ワセリン、ラノリン、セレシン、マイクロクリスタリンワックス、カルナバロウ、キャンデリラロウ、ミツロウ；椰子油脂肪酸、ラウリン酸、硬化牛脂脂肪酸等の高級脂肪酸；ラウリルアルコール、セチルアルコール、ステアリルアルコール、ベヘニルアルコール等の高級アルコール等をあげることができる。

【0052】

液体油としては、例えはアボガド油、オリーブ油、ホホバ油、小麦胚芽油等の植物油；オレイン酸、イソステアリン酸等の脂肪酸；ヘキサデシルアルコール、オレイルアルコール等のアルコール類；2-エチルヘキサン酸セチル、ミリスチン酸-2-オクチルドデシル、ジ-2-エチルヘキサン酸ネオペンチルグリコール、トリ-2-エチルヘキサン酸グリセロール、オレイン酸-2-オクチルドデシル、ミリスチン酸イソプロピル、トリイソステアリン酸グリセロール、2-エチルヘキサン酸ジグリセリド、長鎖アシルケルタミン酸オクチルドデシルエステル等のエステル油；ジメチルポリシロキサン、メチルハイドロジェンポリシロキサン、メチルフェニルポリシロキサン、オクタメチルシクロテトラシロキサン等のシリコン油等；流動バラフィン、スクワレン、スクワラン等の液状炭化水素油等をあげることができる。

【0053】

保湿剤としては、脂溶性保湿剤、低分子保湿剤および高分子保湿剤をあげることができる。

【0054】

脂溶性保湿剤としては、例えは、リゾレシチン、レシチン、コレステロール、コレステロールエステル、スフィンゴ脂質、セラミド等をあげることができる。

【0055】

低分子保湿剤としては、セリン、グルタミン、ソルビトール、マンニトール、グリセリン、ピロリドンカルボン酸ナトリウム、1,3-ブチレングリコール、プロピレングリコール、乳酸、乳酸塩等をあげることができる。

【0056】

高分子保湿剤としては、ヒアルロン酸、ヒアルロン酸ナトリウム、エラスチン、アルギン酸、ムコ多糖類、ポリエチレングリコール、ポリアスパラギン酸塩、水溶性キチン、アテロコラーゲン等をあげることができる。

【0057】

エモリエント剤としては、例えは長鎖アシルグルタミン酸コレステリルエステル、ヒドロキシステアリン酸コレステリル、12-ヒドロキシステアリン酸、ステアリン酸、ロジン酸、ラノリン脂肪酸コレステリルエステル等をあげることができる。

【0058】

水溶性高分子としては、例えはカルボキシメチルセルロース、メチルセルロース、ヒドロキシメチルセルロース、ポリビニルアルコール、ポリビニルピロリドン、トランカントガム、カラギーナン、デキストリン、デキストリン脂肪酸エステル、カルボキシビニルポリマー、キサンタンガム、ゼラチン、アルギン酸ナトリウム、アラビアゴム等の化粧料に汎用される水溶性高分子をあげることができる。

【0059】

油溶性高分子としてはポリビニルピロリドン・エイコセン共重合体、ポリビニルピロリドン・ヘキサデセン共重合体、ニトロセルロース、高分子シリコーン等の化粧料に汎用される油溶性高分子をあげることができる。

【0060】

界面活性剤としては、例えはポリオキシエチレン（以下、P O Eと略記する）

セチルエーテル、P O E ステアリルエーテル、P O E オレイルエーテル、P O E ステアリン酸エステル、P O E ソルビタンモノラウレート、モノグリセリルステアレート等のグリセリン脂肪酸エステル、ボリグリセリン脂肪酸エステル、ボリオキシエチレン硬化ヒマシ油等の非イオン界面活性剤；塩化ベンザルコニウム、塩化ステアリルトリメチルアンモニウム、塩化ジセチルジメチルアンモニウム、塩化ベヘニルトリメチルアンモニウム等のカチオン界面活性剤；2-ココイル-N-カルボキシメチル-N-ヒドロキシエチルイミダゾリニウムベタイン、アミド酢酸ベタイン等の両性界面活性剤；高級アルコール硫酸塩、高級アルコールエーテル硫酸塩、長鎖脂肪酸アルカリ金属塩、長鎖脂肪酸アルカリ土類金属塩、長鎖脂肪酸塩基性アミノ酸塩、N-長鎖アシルアミノ酸、N-長鎖アシルアミノ酸塩等のアニオン界面活性剤をあげることができる。

【0061】

有機および無機顔料としては、例えはケイ酸、無水ケイ酸、ケイ酸マグネシウム、タルク、セリサイト、マイカ、カオリン、ベンカラ、クレー、ペントナイト、チタン被膜雲母、オキシ塩化ビスマス、酸化ジルコニウム、酸化マグネシウム、酸化亜鉛、酸化チタン、酸化アルミニウム、硫酸カルシウム、硫酸バリウム、硫酸マグネシウム、炭酸カルシウム、炭酸マグネシウム、酸化鉄、群青、酸化クロム、水酸化クロム、カラミンおよびカーボンブラックおよびこれらの複合体等の無機粉体；ポリアミド、ポリエステル、ポリプロピレン、ポリスチレン、ポリウレタン、ビニル樹脂、尿素樹脂、フェノール樹脂、フッ素樹脂、ケイ素樹脂、アクリル樹脂、メラミン樹脂、エボキシ樹脂、ポリカーボネート樹脂、ジビニルベンゼン・スチレン共重合体、シルクパウダー、セルロース、C I ピグメントイエロー、C I ピグメントオレンジ等の有機粉体；およびこれらの無機粉体と有機粉体の複合粉体等をあげることができる。

【0062】

有機粉体としては、ステアリン酸カルシウム等の金属石鹼；セチルリン酸亜鉛ナトリウム、ラウリルリン酸亜鉛、ラウリルリン酸カルシウム等のアルキルリン酸多価金属塩；N-ラウロイル- β -アラニンカルシウム、N-ラウロイル- β -アラニン亜鉛、N-ラウロイルグリシンカルシウム等のアシルアミノ酸多価金

属塩；N-ラウロイル- ϵ -タウリンカルシウム、N-バルミトイル- ϵ -タウリンカルシウム等のアミドスルホン酸多価金属塩；N- ϵ -ラウロイル-L-リジン、N- ϵ -バルミトイルリジン、N- α -バルミトイルオルニチン、N- α -ラウロイルアルギニン、N- α -硬化牛脂脂肪酸アシルアルギニン等のN-アシル塩基性アミノ酸；N-ラウロイルグリシルグリシン等のN-アシルポリペプチド； α -アミノカブリル酸、 α -アミノラウリン酸等の α -アミノ脂肪酸；ポリエチレン、ポリブロビレン、ナイロン、ポリメチルメタクリレート、ポリスチレン、ジビニルベンゼン・ステレン共重合体、四フッ化エチレン等の樹脂粉体等を用いることができる。

【0063】

紫外線吸収剤としては、例えはバラオキシ安息香酸エチル、バラオキシ安息香酸ブチル等のバラオキシ安息香酸誘導体、バラアミノ安息香酸、バラジメチルアミノ安息香酸オクチル等のバラアミノ安息香酸誘導体；2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、ジヒドロキシジメトキシベンゾフェノン等のベンゾフェノン誘導体；バラメトキシ桂皮酸エチル、バラメトキシ桂皮酸オクチル等のメトキシ桂皮酸誘導体；サリチル酸オクチル、サリチル酸ホモメンチル等のサリチル酸誘導体；N-ベンソイル- α -メチル- α -デヒドロチロシン2-エチルヘキシリエステル等の α -デヒドロアミノ酸誘導体；4-(3,4-ジメトキシフェニル)メチレン-2,5-ジオキソ-1-イミダゾリジンプロピオン酸2-エチルヘキシリエステル等のベンザールヒダントイン誘導体；ウロカニン酸、ウロカニン酸エチル、4-tert-ブチル-4'-メトキシジベンゾイルメタン、2-(2'-ヒドロキシ-5'-メチルフェニル)ベンゾトリアゾール等をあげることができる。

【0064】

防腐剤としては、例えはメチルバラベン、プロビルバラベン等をあげることができる。

【0065】

肌柔軟剤としては、例えは流動バラフィン、ワセリン、白色ワセリン、オリーブ油、スクワラン、ラノリン、水添ラノリン、合成エステル油等をあげることが

できる。

【0066】

pH調整剤としては、例えはクエン酸、クエン酸ナトリウム等をあげることができる。

【0067】

上記いずれの成分も、本発明の目的、効果を損なわない範囲内で配合可能であるが、好ましくは0.01～5重量%であり、特に好ましくは0.01～3重量%である。

【0068】

本発明に係わる医薬製剤は、活性成分としてヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を単独で、あるいは任意の他の治療のための有効成分との混合物として含有することができる。また、それら医薬製剤は、活性成分を薬理学的に許容される一種もしくはそれ以上の担体と一緒に混合し、製剤学の技術分野においてよく知られている任意の剤型を取ることができます。本発明の医薬品の形態としては、例えは軟膏剤、クリーム剤、発赤剤、テープ剤、外用剤等があげられる。

【0069】

担体としては、例えは結合剤、滑沢剤、分散剤、懸濁剤、乳化剤、希釈剤、緩衝剤、抗酸化剤、細菌抑制剤等があげられる。

【0070】

ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩は、そのまま単独で投与することも可能であるが、通常各種の医薬製剤として提供するのが望ましい。

【0071】

本発明のヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩からなるセラミド合成促進剤を含む化粧料または医薬品の使用方法は年齢、個人、使用する部位により異なるが、ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を有する化粧料または医薬品の濃度が0.001～50重量%、好ましくは0.01～20重量%、特

に好ましくは0.1~1.0重量%であるものを0.1~5μl、好ましくは1~5μl、特に好ましくは2μlを1日1回~数回、肌に塗布することが望ましいがこれに限定されるものではない。

【0072】

次に、実施例および試験例を挙げ本発明を更に詳しく説明するが、本発明はこれらになんら制約されるものではない。

【0073】

【実施例】

実施例1 化粧水の調製

(油相成分)

香料 [d] - ロス' オキサト、木村産業社製]	0.05g
ポリオキシエチレン(60モル)硬化ヒマツ油 [日本エマルション社製]	2.0g
1,3-ブチレングリコール [協和発酵工業株式会社製]	5.0g

(水相成分)

N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-ブロリン [協和発酵工業株式会社製]	3.0g
グリセリン [協和発酵工業株式会社製]	5.0g
メチルパラベン [上野製薬社製]	0.1g
クエン酸 [和光純薬工業社製]	0.1g
クエン酸ナトリウム [和光純薬工業社製]	0.2g
エタノール [日本アルコール社製]	8.0g
精製水	100.0g

(調製法)

油相成分および水相成分をそれぞれ均一に溶解し、油相を水相に攪拌しながら加え、化粧水を得た。

【0074】

実施例2 乳液の調製

(油相成分)

スクワラン [岩瀬コスファ社製]	4.0g
小麦胚芽油 [サミット製油社製]	2.0g

モノグリセリルステアレート【日光ケミカルズ社製】	1.0g
ポリオキシエチレンステアリルエーテル【日本エマルジョン社製】	4.0g
グロビルバラベン【上野製薬社製】	0.1g

(水相成分)

N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-フロリン【協和発酵工業株式会社製】	3.0g
メチルバラベン【上野製薬社製】	0.1g
グロビレンクリコール【和光純薬工業社製】	0.1g
ポリエチレンクリコール6000【日本油脂社製】	0.2g
精製水	80.5g
1%ヒアルロン酸ナトリウム【日光ケミカルズ社製】	5.0g

(調製法)

油相成分および水相成分をそれぞれ80℃に熱して均一にし、水相を油相に攪拌しながら加え、乳液を得た。

【0075】

実施例3 クリームの調製

(油相成分)

スクワラン【日光ケミカルズ社製】	5.0g
オリーブ油【日光ケミカルズ社製】	3.0g
水添ラリシン【野田ワックス社製】	2.0g
ミツロウ【野田ワックス社製】	2.5g
モノグリセリルステアレート【日光ケミカルズ社製】	2.0g
ポリオキシエチレンステアリルエーテル【中外貿易社製】	2.5g
グロビルバラベン【上野製薬社製】	1.5g
1,3-ブチレンクリコール【協和発酵工業株式会社製】	5.0g
香料【d-ロースオキサト、木村産業社製】	微量

(水相成分)

N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-フロリン【協和発酵工業株式会社製】	5.0g
メチルバラベン【上野製薬社製】	0.5g
カーボホール940【グット・リッチ社製】	0.03g

トリエタノールアミン【国産化学社製】

0.3g

精製水

70.97g

(調製法)

油相成分および水相成分をそれぞれ80℃に熱して均一にし、水相を油相に攪拌しながら加え、乳化後冷却しクリームを得た。

【0076】

実施例4 美容液の調製

(油相成分)

コレステリルエーテル【日本エマルジョン社製】 0.2g

ビログリルタミン酸エーテル【日本エマルジョン社製】 1.0g

ラノリン【野田ワックス社製】 0.3g

1,3-ブチレンジオール【協和発酵工業株式会社製】 5.0g

香料【ケラニオール、木村産業社製】 微量

(水相成分)

N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-ブロリン【協和発酵工業株式会社製】 5.0g

1%カーボホール【中外貿易社製】 5.0g

コントロイチン硫酸ナトリウム【岩瀬コスメ社製】 0.02g

エタノール【日本アルコール社製】 1.0g

メチルバラベン【上野製薬社製】 0.1g

1%ヒアルロン酸【日光ケミカルズ社製】 8.0g

0.3%アテロコラーゲン【株式会社高研社製】 1.0g

精製水 73.38g

(調製法)

油相成分および水相成分をそれぞれ80℃に熱して均一にし、水相を油相に攪拌しながら、美容液を得た。

【0077】

実施例5 整肌パウダーの調製

N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-ブロリン【協和発酵工業株式会社製】 5.0g

メチルバラベン【上野製薬社製】 0.5g

アラビ'アコ'ム【岩瀬コスファ社製】	0.03g
クエン酸【和光純薬工業社製】	0.3g
クエン酸ナトリウム【和光純薬工業社製】	0.2g
マンニクト【岩瀬コスファ社製】	適量

(調製法)

各成分を均一にし、攪拌混合して、パウダーを得た。

【0078】

実施例6 軟膏の調製

(油相成分)

白色ワセリン【岩瀬コスファ社製】	0.2g
ステアリルアルコール【日光ケミカルズ社製】	1.0g
ラウリル硫酸ナトリウム【岩瀬コスファ社製】	0.3g

(水相成分)

N-アセチルトランス-4-ヒト'ロキシ-L-フ'ロリン【協和発酵工業株式会社製】	5.0g
フ'ロピ'レンク'リコール【和光純薬工業社製】	5.0g
バラオキシ安息香酸エチル【上野製薬社製】	0.02g
バラオキシ安息香酸フ'チル【上野製薬社製】	1.0g
精製水	81.45g

(調製法)

相成分および水相成分をそれぞれ80°Cに熱して均一にし、水相を油相に攪拌しながら、乳化後冷却し軟膏を得た。

【0079】

実施例7 パックの調製

(油相成分)

エタノール【日本アルコール社製】	8.0g
ホリオキシエチレンオレイルエーテル【日光ケミカルズ社製】	1.0g
バラオキシ安息香酸メチル	0.2g

(水相成分)

N-アセチルトランス-4-ヒト'ロキシ-L-フ'ロリン【協和発酵工業株式会社製】	5.0g
--	------

ブロビレンクリコール	4.0 g
グリセリン【協和醸酵工業社製】	5.0 g
ホリビニルアルコール【信越化学工業社製】	15.0 g
精製水	61.6 g
香料【ケラニオール、木村産業社製】	0.2 g

(調製法)

水相成分、油相成分およびそれぞれ80℃に熱して均一にし、水相を油相に攪拌しながら、バックを得た。

【0080】

実施例8 テープ剤の調製

(粘着剤溶剤)

スチレン-イソブロビレン-スチレンブロック共重合体【シェル社製】	7.0 g
エステルガム【大日本インキ化学社製】	25.0 g
イソブロビレンゴム【クラレ社製】	5.0 g
トルエン【岩瀬コスファ社製】	15.0 g
酢酸エチル【キシタ化学社製】	14.2 g
ヘキサン【キシタ化学社製】	25.0 g

(薬効成分)

N-アセチルトランス-4-ヒトロキシ-L-フロリン【協和発酵工業株式会社製】	3.0 g
エタノール【日本アルコール社製】	5.0 g

(経皮吸収促進剤)

オレインアルコール【岩瀬コスファ社製】	0.8 g
---------------------	-------

(調製法)

粘着剤溶剤、薬効成分をそれぞれ均一にし、薬効成分、経皮吸収促進剤を粘着剤溶剤に加え、室温で攪拌し組成物を得た。この組成物をシリコーン処理したポリエスルフィルム上に延展し、120℃で乾燥させ冷却後、ポリエチレンフィルムへ粘着剤層を転写させ、テープ剤を得た。

【0081】

試験例1 ヘアレスマウスにおける表皮セラミド合成量の評価

N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-プロリンをそれぞれ0、1、0、3.0、5.0、10.0重量%含有する30重量%エタノール水溶液を調製し試験組成物1～5を得た。本水溶液のpHは、水酸化ナトリウムでpH4.5に調整した。

【0082】

ヘアレスマウス (SKH1:hr/hr:BR, 雄, 7週令, チャールスリバー社製) に、1日1回、1ヶ月間、被検部位である背部全面に上記試験組成物1～5を200μlずつ塗布した。マウスは各群4匹ずつ用いた。

塗布を開始する前、および塗布を開始してから1ヶ月後に、各マウスの被検部位である背部全面より表皮脂質を抽出し、セラミド含量を測定し、N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-プロリンのセラミド合成能を評価した。

【0083】

表皮脂質は95%エタノールで抽出し、これをさらにヘキサン：メタノール（2:3）で抽出し乾固させて取得した。得られた表皮脂質をクロロホルムに溶解し、芋川ら【ジャーナル・オブ・デルマトロジー (Journal of Investigative Dermatology), 96, 523 (1991)】方法に準じて、シリカゲル薄層クロマトグラフィーにて分離後、フライングスポットスキャニングデンシトメーター（島津製作所社製、CS-9000）でセラミド含量を測定した。

【0084】

セラミド含量は、無処理のマウスのセラミド合成量変化に対する相対値として、下記、式1に従って算出した。

【0085】

【式1】

$$\text{相対セラミド合成量(%)} = [(A_1 \times B_2) / (A_2 \times B_1)] \times 100$$

A1 : 被検マウスの塗布後セラミド含量

A2 : 被検マウスの塗布前セラミド含量

B1 : 無処理マウスの塗布後セラミド含量

B2 : 無処理マウスの塗布前セラミド含量

【0086】

セラミドには数種の異性体が存在することが知られており、総セラミド合成量および各種セラミド合成量に分別して算出した。標準品はシグマ社製のセラミドIII (ceramide III、セラミド1および2からなる。) およびセラミドIV (ceramide IV、セラミド4および5からなる。) を用いた。ここで総セラミドとはセラミド1、2、4および5の合計を意味し、セラミドIIIとはセラミド1および2の合計を意味する。なお、セラミド1、2、4および5は、それぞれジャーナル・オブ・リビッド・リサーチ, 24, 559 (1983) の第2図に記載されている化合物1、2、4および5に対応する。

【0087】

結果を第1表および第2表に示す。

【0088】

【表1】

N-アセチル-トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン濃度 (%)	相対総セラミド合成量 (%)
0	111.1
1	218.6
3	170.6

【0089】

【表2】

N-アセチル-トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン濃度 (重量%)	相対セラミドIII合成量 (%)
0	126.4
1	239.5
3	321.1
5	209.6
10	185.9

【0090】

長期連用により、N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン濃

度1～3重量%で表皮角質層における総セラミド含量並びにN-アセチル-トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン濃度1～10重量%でセラミドIIIの顯著な増加が認められた。

以上、本発明のセラミド合成促進剤は、表皮角質層中のセラミド合成を促進する機能を有することから、皮膚バリアー機能を改善することによって荒れ肌やアトピー性皮膚炎などの皮膚疾患の改善に有効である。

【0091】

【発明の効果】

本発明により、皮膚のセラミド生合成能を高め、荒れ肌やアトピー性皮膚炎などの皮膚疾患の改善に有効なヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそのこれら塩を有効成分として含有する皮膚表皮セラミド合成促進剤を提供することができる。

【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 皮膚表皮角質層におけるセラミド合成を促進し、皮膚バリアー機能を改善し、荒れ肌改善やアトピー性皮膚炎などの皮膚疾患の予防または改善に効果を有する安全なセラミド合成促進剤および該セラミド合成促進剤を含有する化粧料を提供する。

【解決手段】 ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル化誘導体またはその塩を有効成分として含有する皮膚表皮セラミド合成促進剤、皮膚表皮バリアー機能改善剤およびアトピー性皮膚炎の予防または改善剤並びに該皮膚表皮セラミド合成促進剤を含有する皮膚バリアー機能改善またはアトピー性皮膚炎の改善のための化粧料。

【選択図】 なし

出願人履歴

000001029

19900806

新規登録

東京都千代田区大手町1丁目6番1号

協和醸酵工業株式会社

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office

出願年月日

Date of Application: 2000年 7月19日

出願番号

Application Number: 特願2000-218184

[ST.10/C]: [JP2000-218184]

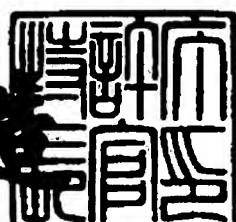
出願人

Applicant(s): 協和醸酵工業株式会社

2002年 3月 2日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

及川耕三



【書類名】特許願

【整理番号】H12-0629K5

【提出日】平成12年 7月19日

【あて先】特許庁長官殿

【国際特許分類】

A61K 7/00

【発明者】

【住所又は居所】茨城県つくば市御幸が丘2番地 協和醸酵工業株式会社 筑波研究所内

【氏名】小林 麻子

【発明者】

【住所又は居所】茨城県つくば市御幸が丘2番地 協和醸酵工業株式会社 筑波研究所内

【氏名】高橋 知也

【発明者】

【住所又は居所】東京都千代田区大手町一丁目6番1号 協和醸酵工業株式会社 本社内

【氏名】竹越 与一郎

【特許出願人】

【識別番号】000001029

【氏名又は名称】協和醸酵工業株式会社

【代表者】平田 正

【手数料の表示】

【予納台帳番号】008187

【納付金額】21,000

【提出物件の目録】

【物件名】明細書 1

【物件名】要約書 1

【ブルーフの要否】要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 セラミド合成促進剤

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を有効成分として含有する皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【請求項 2】 ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を全重量に対し0.01～20重量%含有することを特徴とする、請求項1記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【請求項 3】 ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体が、N-アセチル化誘導体、N-プロピオニル化誘導体、N-ブチリル化誘導体またはイソブチリル化誘導体である、請求項1または2記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【請求項 4】 ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、シス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-3-ヒドロキシ-L-プロリンおよびトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリンからなる群より選ばれるヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体である、請求項1～3いずれかに記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【請求項 5】 ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、微生物により生産されたものである、請求項1～4いずれかに記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【請求項 6】 微生物が、アミコラトプシス属、ダクチロスボランジウム属およびストレプトマイセス属から選ばれる属に属する微生物由来のプロリン3位水酸化酵素遺伝子またはプロリン4位水酸化酵素遺伝子を導入された微生物である、請求項5記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【請求項 7】 ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を有効成分として含有する皮膚表皮バリアー機能改善

剤。

【請求項8】 ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を全重量に対し0.01～20重量%含有することを特徴とする、請求項7記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【請求項9】 ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体が、N-アセチル化誘導体、N-プロピオニル化誘導体、N-ブチリル化誘導体またはイソブチリル化誘導体である、請求項7または8記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【請求項10】 ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、シス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-3-ヒドロキシ-L-プロリンおよびトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリンからなる群より選ばれるヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体である、請求項7～9いずれかに記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【請求項11】 ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、微生物により生産されたものである、請求項7～10いずれかに記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【請求項12】 微生物が、アミコラトプシス属、ダクチロスボランジウム属およびストレプトマイセス属から選ばれる属に属する微生物由来のプロリン3位水酸化酵素遺伝子またはプロリン4位水酸化酵素遺伝子を導入された微生物である、請求項11記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【請求項13】 ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を有効成分として含有するアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【請求項14】 ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を全重量に対し0.01～20重量%含有することを特徴とする、請求項13記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【請求項15】 ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体が、N-アセチル

化誘導体、N-プロピオニル化誘導体、N-ブチリル化誘導体またはイソブチリル化誘導体である、請求項13または14記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【請求項16】 ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、シス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-3-ヒドロキシ-L-プロリンおよびトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリンからなる群より選ばれるヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体である、請求項13～15いずれかに記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【請求項17】 ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、微生物により生産されたものである、請求項13～16いずれかに記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【請求項18】 微生物が、アミコラトブシス属、ダクチロスボランジウム属およびストレプトマイセス属から選ばれる属に属する微生物由来のプロリン3位水酸化酵素遺伝子またはプロリン4位水酸化酵素遺伝子を導入された微生物である、請求項17記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【請求項19】 請求項1～6のいずれかに記載のセラミド合成促進剤を含有する、皮膚バリアー機能改善またはアトピー性皮膚炎の改善のための化粧料。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、セラミド合成促進剤および該セラミド合成促進剤を配合した化粧料に関する。

【0002】

【従来の技術】

皮膚は常に様々な外部環境からの刺激にさらされている。皮膚の角質層にはこれら外界からの刺激や異物の侵入を防いだり、体内の水分の蒸散を防ぐバリアー

機能が備わっている。バリアー機能の低下している人や動物では、皮膚角質層中のセラミド量が低下していることが知られている[ジャーナル・オブ・リビッド・リサーチ (Journal of Lipid Research), 30, 89 (1989)]。また、バリアー機能低下の認められるアトピー性皮膚炎患者もセラミド量が減少していることが報告されている[アクタ・デルマト・ヴェネレオロジカ (Acta Dermato Venereologica), 78, 27 (1998)]。

【0003】

従来、バリアー機能を改善する手段として、セラミドの外用が検討され、その有効性が確認されている[フレグランスジャーナル, 10, 29 (1999)]。また、セラミドの大量入手が容易でないことから、最近では皮膚のセラミド産生を高める物質の探索が行われてきている。

【0004】

皮膚セラミドには種々の種類があることが知られている [ジャーナル・オブ・リビッド・リサーチ, 24, 559 (1983)]。各セラミドは特定の生理作用を有していることが知られている。特にセラミド1は角質細胞間脂質を安定に保持することにより水分蒸散量を調節し、セラミド2は皮膚の水分保持機能に寄与していることが報告されている [フレグランスジャーナル, 10, 65 (1999)]。

【0005】

セラミドの生合成を促進するものとしては、ユーカリエキス[第24回日本研究皮膚科学会学術大会(1999)]、ニコチン酸[特開平8-217658号公報]、N-アセチル-L-システイン[特開平7-291851号公報]、酵母エキス[特開平9-2952号公報]、乳酸[アーチベス・オブ・デルマトロジカル・リサーチ (Archives of Dermatological Research), 383-390, 288 (1996)]等が報告されている。

【0006】

しかし、これまでに、ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体による皮膚表皮セラミド合成促進作用については知られていない。

【0007】

【発明が解決しようとする課題】

本発明の目的は、皮膚表皮角質層におけるセラミド合成を促進し、皮膚バリア機能を改善し、荒れ肌改善やアトピー性皮膚炎などの皮膚疾患の予防または改善に効果を有する安全なセラミド合成促進剤および該セラミド合成促進剤を含有する化粧料を提供することにある。

【0008】

【課題を解決するための手段】

本発明者らは、皮膚表皮角質層におけるセラミド合成を促進させることに關し、銳意検討した結果、ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩に皮膚表皮角質層におけるセラミド合成促進効果を見出し本発明を完成するに至った。

【0009】

即ち、本発明は以下(1)～(19)に関する。

(1) ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を有効成分として含有する皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【0010】

(2) ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を全重量に対し0.01～20重量%含有することを特徴とする、前記(1)記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【0011】

(3) ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体が、N-アセチル化誘導体、N-プロピオニル化誘導体、N-ブチリル化誘導体またはイソブチリル化誘導体である、前記(1)または(2)記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【0012】

(4) ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、シス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-3-ヒドロキシ-L-プロリンおよびトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリンからなる群より選ばれるヒ

ドロキシプロリンのN-アシル誘導体である、前記(1)～(3)いずれかに記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【0013】

(5) ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、微生物により生産されたものである、前記(1)～(4)いずれかに記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【0014】

(6) 微生物が、アミコラトブシス属、ダクチロスポランジウム属およびストレプトマイセス属から選ばれる属に属する微生物由来のプロリン3位水酸化酵素遺伝子またはプロリン4位水酸化酵素遺伝子を導入された微生物である、前記(5)記載の皮膚表皮セラミド合成促進剤。

【0015】

(7) ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を有効成分として含有する皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【0016】

(8) ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を全重量に対し0.01～20重量%含有することを特徴とする、前記(7)記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【0017】

(9) ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体が、N-アセチル化誘導体、N-プロピオニル化誘導体、N-ブチリル化誘導体またはイソブチリル化誘導体である、前記(7)または(8)記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【0018】

(10) ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、シス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-3-ヒドロキシ-L-プロリンおよびトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリンからなる群より選ばれる

ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体である、前記(7)～(9)いずれかに記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【0019】

(11) ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、微生物により生産されたものである、前記(7)～(10)いずれかに記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【0020】

(12) 微生物が、アミコラトブシス属、ダクチロスボランジウム属およびストレプトマイセス属から選ばれる属に属する微生物由来のプロリン3位水酸化酵素遺伝子またはプロリン4位水酸化酵素遺伝子を導入された微生物である、前記(11)記載の皮膚表皮バリアー機能改善剤。

【0021】

(13) ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を有効成分として含有するアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【0022】

(14) ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を全重量に対し0.01～20重量%含有することを特徴とする、前記(13)記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【0023】

(15) ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体が、N-アセチル化誘導体、N-プロピオニル化誘導体、N-ブチリル化誘導体またはイソブチリル化誘導体である、前記(13)または(14)記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【0024】

(16) ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、シス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、

トランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-3-ヒドロキシ-L-プロリンおよびトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリンからなる群より選ばれるヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体である、前記(13)～(15)いずれかに記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【0025】

(17) ヒドロキシプロリンまたはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体におけるヒドロキシプロリンが、微生物により生産されたものである、前記(13)～(16)いずれかに記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【0026】

(18) 微生物が、アミコラトブシス属、ダクチロスボランジウム属およびストレブトマイセス属から選ばれる属に属する微生物由来のプロリン3位水酸化酵素遺伝子またはプロリン4位水酸化酵素遺伝子を導入された微生物である、前記(17)記載のアトピー性皮膚炎の予防または改善剤。

【0027】

(19) 前記(1)～(6)のいずれかに記載のセラミド合成促進剤を含有する、皮膚バリアー機能改善またはアトピー性皮膚炎の改善のための化粧料。

【0028】

【発明の実施の形態】

本発明に使用するヒドロキシプロリンは、プロリンがD体かL体か、また水酸基の位置が3位か4位か、およびその立体異性体がシスかトランスかによって、8種類の立体異性体があるが、いずれでも用いうる。

【0029】

ヒドロキシプロリンとしてはの具体例としては、例えばシス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、シス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、トランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、トランス-3-ヒドロキシ-L-プロリンおよびトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリンがあげられる。

【0030】

ヒドロキシプロリンは、コラーゲン中の主要構成アミノ酸成分として、また、エラスチンの構成アミノ酸として自然界に広く存在するアミノ酸の一種であり、例えばブタやウシ等の動物由来のコラーゲンを酸加水分解し、常法により精製することにより製造することができる。

【0031】

トランスー4-ヒドロキシ-L-プロリンは、アミコラトプシス (Amycolatopsis) 属またはダクチロスボランジウム (Dactylosporangium) 属より単離したプロリン4位水酸化酵素（特開平7-313179号公報）を用い製造することができる。またシスー3-ヒドロキシ-L-プロリンは、ストレブトマイセス (Streptomyces) 属より単離したプロリン3位水酸化酵素（特開平7-322885号公報）を用い製造することができる【バイオインダストリー, 14, 31 (1997)】。

【0032】

具体的には、上記微生物由来のプロリン3位水酸化酵素またはプロリン4位水酸化酵素をコードする遺伝子を適當なベクターに挿入して組換えベクターを作製し、当該組換えベクターを宿主とする微生物に導入し、当該微生物を培養することによりヒドロキシプロリンを製造することができる。

本発明においては、微生物を用いて製造したヒドロキシプロリンがより品質の優れたものが容易に得られる点で好ましい。

【0033】

本発明で用いるヒドロキシプロリンのN-アシリル誘導体としては、上述の各種ヒドロキシプロリンの立体異性体のN-アシリル誘導体があげられる。該N-アシリル誘導体のアシリル基としては、特に制限がないが、好ましくは炭素数1～24、より好ましくは炭素数1～12、特に好ましくは炭素数1～6のアシリル基があげられ、具体的には、例えはホルミル、アセチル、プロピオニル、ブチリル、イソブチリル、バレリル、ピバロイル、ヘキサノイル、ヘプタノイル、オクタノイル、ノナノイル、デカノイル、ウンデカノイル、ドデカノイル等をあげることができ、アセチル、プロピオニル、ブチリル、イソブチリルが好ましい。

【0034】

ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体の塩としては、ナトリウム、カリウム、リチウム等のアルカリ金属塩、カルシウム、マグネシウム等のアルカリ土類金属塩、アンモニウム塩、モノエタノールアミン、ジエタノールアミン、トリエタノールアミン、トリイソプロパノールアミンなどのアミンの付加塩およびアルギニン、リジン等の塩基性アミノ酸の付加塩などがあげられる。

【0035】

ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体は、公知の方法により調製することができる。例えば、ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体は、直鎖または分岐状の炭素数1～24の飽和または不飽和の脂肪酸を塩化チオニル、ホスゲン等のハロゲン化剤を用いてクロライド、プロマイド等のハロゲン化物に変換した後、前述のヒドロキシプロリンと縮合させるか、または脂肪酸を酸無水物に変換した後、ヒドロキシプロリンと反応させることにより製造することができる。

【0036】

脂肪酸としては、例えはギ酸、酢酸、プロピオン酸、酪酸、イソ酪酸、吉草酸、イソ吉草酸、ビバル酸、ヘキサン酸、ヘプタン酸、オクタン酸、ノナン酸、デカン酸、ウンデカン酸、ドデカン酸等の脂肪酸を単独もしくは組合せたものが用いられる。

【0037】

酸ハロゲン化物を経由するヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体の製造方法を、以下に例示する。

【0038】

脂肪酸を塩化メチレン、クロロホルム、四塩化炭素、ベンゼン、トルエン、キシレン、n-ヘキサン等の溶媒中に分散し、これに1～5倍当量のハロゲン化剤を添加して反応させ、脂肪酸ハライドを得る。次に、ヒドロキシプロリンを溶媒に溶解または分散させ、得られた溶液を5～70℃に保ちながら、上記の脂肪酸ハライドをヒドロキシプロリンに対して0.3～3.0倍当量加え、アシル化反応を行うことによりヒドロキシプロリンのN-アシル化誘導体を製造することができる。

【0039】

アシル化反応に用いられる溶媒としては、水、メタノール、エタノール、イソプロパノール、イソブタノール、アセトン、トルエン、テトラヒドロフラン、酢酸エチル、N,N-ジメチルホルムアミド、ジメチルスルホキシド等があげられ、これらは単独あるいは混合して用いてもよい。ヒドロキシプロリンを溶媒に溶解または分散する際、ヒドロキシプロリンに対して0.8~2.0倍当量の水酸化ナトリウム、水酸化カリウム等のアルカリ物質を必要に応じて溶媒に溶解または分散させてもよい。

【0040】

ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体の塩を取得したいとき、ヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体が塩の形で得られる場合には、そのまま精製すればよく、遊離の形で得られる場合には、適当な溶媒に溶解または懸濁し、塩基を加えて塩を形成させればよい。

精製は、例えは結晶化、クロマトグラフィー等の通常の方法が用いられる。

【0041】

具体的なヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体としては、例えば、N-アセチルシス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、N-アセチルシス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、N-アセチルシス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、N-アセチルシス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、N-アセチルトランス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、N-アセチルトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、N-プロピオニルシス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、N-プロピオニルシス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、N-プロピオニルシス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、N-プロピオニルシス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、N-プロピオニルトランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、N-プロピオニルトランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、N-プロピオニルトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、N-プロピオニルトランス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、N-ブチリルシス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、N-ブチリルシス-4-ヒドロキ

シーデープロリン、N-ブチリルーシス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、N-ブチリルーシス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、N-ブチリルトランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、N-ブチリルトランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、N-ブチリルトランス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、N-ブチリルトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、N-イソブチリルーシス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、N-イソブチリルーシス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、N-イソブチリルーシス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、N-イソブチリルトランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、N-イソブチリルトランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、N-イソブチリルトランス-3-ヒドロキシ-L-プロリン、N-イソブチリルトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリン、N-イソブチリルトランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン、N-イソブチリルトランス-4-ヒドロキシ-D-プロリン、N-イソブチリルトランス-3-ヒドロキシ-D-プロリン等をあげることができる。

【0042】

本発明の皮膚表皮セラミド合成促進剤において、ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩は、シス/トランス-4-ヒドロキシ-L/D-プロリン、シス/トランス-3-ヒドロキシ-L/D-プロリン、もしくはこれらの種々のN-アシル誘導体またはその塩を、単独または混合して用いることができる。

【0043】

皮膚表皮セラミド合成促進剤中のヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩の含有量は目的とする効果に応じて増減させることができ、例えば、0.001~50重量%、好ましくは0.01~20重量%、特に好ましくは0.1~10重量%である。

【0044】

本発明において、セラミドとは、N-アシルスフィンゴシン誘導体を意味し、例えばジャーナル・オブ・リピッド・リサーチ, 24, 559 (1983) の図2に記載された化合物等をあげることができる。

【0045】

本発明を適用できる皮膚表皮としては、特に制限がないが例えばマウス、イヌ

、ネコ、ウマ等の愛玩動物等及びヒトの皮膚表皮が例示でき、ヒト皮膚表皮が好ましい。

【0046】

皮膚表皮のセラミドは、表皮脂質を例えれば95%エタノールで抽出し、これをさらにヘキサン：メタノール（2：3）で抽出し乾固させて取得し、得られた表皮脂質をクロロホルムに溶解し、芋川ら【ジャーナル・オブ・デルマトロジー（Journal of Investigative Dermatology），96, 523 (1991)】方法に準じて、シリカゲル薄層クロマトグラフィーにて分離後、フライングスポットスキャニングデンシトメーター（島津製作所社製、CS-9000）で測定することができる。

【0047】

本発明の皮膚表皮セラミド合成促進剤は、上記必須成分に加え、適宜、各用途に適した添加剤、例えは、医薬担体や通常化粧料に配合される成分等を含有させることにより化粧品や医薬品等の用途に使用することができる。

【0048】

本発明の皮膚表皮セラミド合成促進剤の化粧品および医薬品の形態の例としては、以下に例を挙げて説明するが、これに限定されるものではない。

【0049】

本発明の化粧品の形態としては、液状製品、ゲル状製品、乳液状製品、クリーム等の固形状製品をあげることができ、例えは、化粧水、乳液、美容液、ジェル、パック、モイスチャーケア、コールドクリーム、マッサージクリーム、アフターシェービングクリーム、ハンドクリーム、日焼け止めクリーム、クレンジングクリーム、ボディーローション、ボディシャンプー、ヘアシャンプー、洗顔クリーム、洗顔フォーム、クレンジングクリーム、クレンジングミルク、クレンジングローション、マッサージクリーム、日焼け止めクリーム、日焼け用オイル、ヘアリンス、ヘアトリートメント、養毛料、育毛料、チック、ヘアクリーム、ヘアリキッド、セットローション、ヘアスプレー、ヘアダイ、ヘアブリーチ、カラーリンス、カラースプレー、バーマネットウェーブ液、プレスパウダー、ルースパウダー、アイシャドー、ハンドクリーム等があげられる。

【0050】

本発明の化粧品は、ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩に、化粧品に使用される一般的な原料、例えは、固体油・半固体油、液体油、保湿剤、エモリエント剤、水溶性高分子、油溶性高分子、各種界面活性剤、シリコーンまたはフッ素化合物で処理されていてもよい無機および有機顔料、エタノール、紫外線吸収剤、防腐剤、pH調整剤、皮膚柔軟剤、水等を含有させることができ、本発明の目的、効果を損なわない質的、量的範囲内で含有可能である。

【0051】

固体・半固体油としては、ワセリン、ラノリン、セレシン、マイクロクリスタリンワックス、カルナバロウ、キャンデリラロウ、ミツロウ；椰子油脂肪酸、ラウリン酸、硬化牛脂脂肪酸等の高級脂肪酸；ラウリルアルコール、セチルアルコール、ステアリルアルコール、ベヘニルアルコール等の高級アルコール等をあげることができる。

【0052】

液体油としては、例えはアボガド油、オリーブ油、ホホバ油、小麦胚芽油等の植物油；オレイン酸、イソステアリン酸等の脂肪酸；ヘキサデシルアルコール、オレイルアルコール等のアルコール類；2-エチルヘキサン酸セチル、ミリスチン酸-2-オクチルドデシル、ジ-2-エチルヘキサン酸ネオベンチルグリコール、トリ-2-エチルヘキサン酸グリセロール、オレイン酸-2-オクチルドデシル、ミリスチン酸イソプロピル、トリイソステアリン酸グリセロール、2-エチルヘキサン酸ジグリセリド、長鎖アシルグルタミン酸オクチルドデシルエステル等のエステル油；ジメチルポリシロキサン、メチルハイドロジェンポリシロキサン、メチルフェニルポリシロキサン、オクタメチルシクロテトラシロキサン等のシリコン油等；流動パラフィン、スクワレン、スクワラン等の液状炭化水素油等をあげることができる。

【0053】

保湿剤としては、脂溶性保湿剤、低分子保湿剤および高分子保湿剤をあげることができる。

【0054】

脂溶性保湿剤としては、例えは、リゾレシチン、レシチン、コレステロール、コレステロールエステル、スフィンゴ脂質、セラミド等をあげることができる。

【0055】

低分子保湿剤としては、セリン、グルタミン、ソルビトール、マンニトール、グリセリン、ピロリドンカルボン酸ナトリウム、1,3-ブチレングリコール、プロピレングリコール、乳酸、乳酸塩等をあげることができる。

【0056】

高分子保湿剤としては、ヒアルロン酸、ヒアルロン酸ナトリウム、エラスチン、アルギン酸、ムコ多糖類、ポリエチレングリコール、ポリアスパラギン酸塩、水溶性キチン、アテロコラーゲン等をあげることができる。

【0057】

エモリエント剤としては、例えは長鎖アシルグルタミン酸コレステリルエステル、ヒドロキシステアリン酸コレステリル、12-ヒドロキシステアリン酸、ステアリン酸、ロジン酸、ラノリン脂肪酸コレステリルエステル等をあげることができる。

【0058】

水溶性高分子としては、例えはカルボキシメチルセルロース、メチルセルロース、ヒドロキシメチルセルロース、ポリビニルアルコール、ポリビニルビロリドン、トランガントガム、カラギーナン、デキストリン、デキストリン脂肪酸エステル、カルボキシビニルポリマー、キサンタンガム、ゼラチン、アルギン酸ナトリウム、アラビアゴム等の化粧料に汎用される水溶性高分子をあげることができる。

【0059】

油溶性高分子としてはポリビニルビロリドン・エイコセン共重合体、ポリビニルビロリドン・ヘキサデセン共重合体、ニトロセルロース、高分子シリコーン等の化粧料に汎用される油溶性高分子をあげることができる。

【0060】

界面活性剤としては、例えはポリオキシエチレン（以下、POEと略記する）セチルエーテル、POEステアリルエーテル、POEオレイルエーテル、POE

ステアリン酸エステル、P O E ソルビタンモノラウレート、モノグリセリルステアレート等のグリセリン脂肪酸エステル、ポリグリセリン脂肪酸エステル、ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油等の非イオン界面活性剤；塩化ベンザルコニウム、塩化ステアリルトリメチルアンモニウム、塩化ジセチルジメチルアンモニウム、塩化ベヘニルトリメチルアンモニウム等のカチオン界面活性剤；2-ココイル-N-カルボキシメチル-N-ヒドロキシエチルイミダゾリニウムベタイン、アミド酢酸ベタイン等の両性界面活性剤；高級アルコール硫酸塩、高級アルコールエーテル硫酸塩、長鎖脂肪酸アルカリ金属塩、長鎖脂肪酸アルカリ土類金属塩、長鎖脂肪酸塩基性アミノ酸塩、N-長鎖アシルアミノ酸、N-長鎖アシルアミノ酸塩等のアニオン界面活性剤をあげることができる。

【0061】

有機および無機顔料としては、例えはケイ酸、無水ケイ酸、ケイ酸マグネシウム、タルク、セリサイト、マイカ、カオリン、ベンカラ、クレー、ペントナイト、チタン被膜雲母、オキシ塩化ビスマス、酸化ジルコニウム、酸化マグネシウム、酸化亜鉛、酸化チタン、酸化アルミニウム、硫酸カルシウム、硫酸バリウム、硫酸マグネシウム、炭酸カルシウム、炭酸マグネシウム、酸化鉄、群青、酸化クロム、水酸化クロム、カラミンおよびカーボンブラックおよびこれらの複合体等の無機粉体；ポリアミド、ポリエステル、ポリプロピレン、ポリスチレン、ポリウレタン、ビニル樹脂、尿素樹脂、フェノール樹脂、フッ素樹脂、ケイ素樹脂、アクリル樹脂、メラミン樹脂、エボキシ樹脂、ポリカーボネート樹脂、ジビニルベンゼン・スチレン共重合体、シルクパウダー、セルロース、C I ピグメントイエロー、C I ピグメントオレンジ等の有機粉体；およびこれらの無機粉体と有機粉体の複合粉体等をあげることができる。

【0062】

有機粉体としては、ステアリン酸カルシウム等の金属石鹼；セチルリン酸亜鉛ナトリウム、ラウリルリン酸亜鉛、ラウリルリン酸カルシウム等のアルキルリン酸多価金属塩；N-ラウロイル- β -アラニンカルシウム、N-ラウロイル- β -アラニン亜鉛、N-ラウロイルグリシンカルシウム等のアシルアミノ酸多価金属塩；N-ラウロイル-タウリンカルシウム、N-バルミトイル-タウリンカル

シウム等のアミドスルホン酸多価金属塩；N_ε-ラウロイル-L-リジン、N_ε-バカルミトイルリジン、N_α-バカルミトイロアルニチン、N_α-ラウロイルアルギニン、N_α-硬化牛脂脂肪酸アシルアルギニン等のN-アシル塩基性アミノ酸；N-ラウロイルグリシルグリシン等のN-アシルポリペプチド；α-アミノカブリル酸、α-アミノラウリン酸等のα-アミノ脂肪酸；ポリエチレン、ポリプロピレン、ナイロン、ポリメチルメタクリレート、ポリスチレン、ジビニルベンゼン・ステレン共重合体、四フッ化エチレン等の樹脂粉体等を用いることができる。

【0063】

紫外線吸収剤としては、例えはバラオキシ安息香酸エチル、バラオキシ安息香酸ブチル等のバラオキシ安息香酸誘導体、バラアミノ安息香酸、バラジメチルアミノ安息香酸オクチル等のバラアミノ安息香酸誘導体；2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、ジヒドロキシジメトキシベンゾフェノン等のベンゾフェノン誘導体；バラメトキシ桂皮酸エチル、バラメトキシ桂皮酸オクチル等のメトキシ桂皮酸誘導体；サリチル酸オクチル、サリチル酸ホモメンチル等のサリチル酸誘導体；N-ベンソイル-α-メチル-α-デヒドロチロシン2-エチルヘキシルエステル等のα-デヒドロアミノ酸誘導体；4-(3,4-ジメトキシフェニル)メチレン-2,5-ジオキソ-1-イミダゾリジンプロピオン酸2-エチルヘキシルエステル等のベンザールヒダントイン誘導体；ウロカニン酸、ウロカニン酸エチル、4-tert-ブチル-4'-メトキシジベンゾイルメタン、2-(2'-ヒドロキシ-5'-メチルフェニル)ベンゾトリアゾール等をあげることができる。

【0064】

防腐剤としては、例えはメチルバラベン、プロピルバラベン等をあげることができる。

【0065】

肌柔軟剤としては、例えは流動バラフィン、ワセリン、白色ワセリン、オリーブ油、スクワラン、ラノリン、水添ラノリン、合成エステル油等をあげることができる。

【0066】

pH調整剤としては、例えはクエン酸、クエン酸ナトリウム等をあげることができる。

【0067】

上記いずれの成分も、本発明の目的、効果を損なわない範囲内で配合可能であるが、好ましくは0.01～5重量%であり、特に好ましくは0.01～3重量%である。

【0068】

本発明に係わる医薬製剤は、活性成分としてヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を単独で、あるいは任意の他の治療のための有効成分との混合物として含有することができる。また、それら医薬製剤は、活性成分を薬理学的に許容される一種もしくはそれ以上の担体と一緒に混合し、製剤学の技術分野においてよく知られている任意の剤型を取ることができます。本発明の医薬品の形態としては、例えは軟膏剤、クリーム剤、発布剤、テープ剤、外用剤等があげられる。

【0069】

担体としては、例えは結合剤、滑沢剤、分散剤、懸濁剤、乳化剤、希釈剤、緩衝剤、抗酸化剤、細菌抑制剤等があげられる。

【0070】

ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩は、そのまま単独で投与することも可能であるが、通常各種の医薬製剤として提供するのが望ましい。

【0071】

本発明のヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩からなるセラミド合成促進剤を含む化粧料または医薬品の使用方法は年齢、個人、使用する部位により異なるが、ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそれらの塩を有する化粧料または医薬品の濃度が0.001～50重量%、好ましくは0.01～20重量%、特に好ましくは0.1～10重量%であるものを0.1～5μl、好ましくは1～

5 μl、特に好ましくは2 μlを1日1回～数回、肌に塗布することが望ましいがこれに限定されるものではない。

【0072】

次に、実施例および試験例を挙げ本発明を更に詳しく説明するが、本発明はこれらになんら制約されるものではない。

【0073】

【実施例】

実施例1 化粧水の調製

(油相成分)

香料 [d1-ロース'オキサト、木村産業社製]	0.05g
ホリオキシエチレン(60モル)硬化ヒマツ油 [日本エマルション社製]	2.0g
1,3-ブチレングリコール [協和発酵工業株式会社製]	5.0g

(水相成分)

N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-フロリン [協和発酵工業株式会社製]	3.0g
グリセリン [協和発酵工業株式会社製]	5.0g
メチルバラベン [上野製薬社製]	0.1g
クエン酸 [和光純薬工業社製]	0.1g
クエン酸ナトリウム [和光純薬工業社製]	0.2g
エタノール [日本アルコール社製]	8.0g
精製水	100.0g

(調製法)

油相成分および水相成分をそれぞれ均一に溶解し、油相を水相に攪拌しながら加え、化粧水を得た。

【0074】

実施例2 乳液の調製

(油相成分)

スクワラン [岩瀬コスファ社製]	4.0g
小麦胚芽油 [サミット製油社製]	2.0g
モノグリセリルステアレート [日光ケミカルズ社製]	1.0g

ボリオキシエチレンステアリルエーテル【日本エマルション社製】	4.0 g
プロピルバラヘン【上野製薬社製】	0.1 g
(水相成分)	
N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-フロリン【協和発酵工業株式会社製】	3.0 g
メチルバラヘン【上野製薬社製】	0.1 g
プロピレンクリコール【和光純薬工業社製】	0.1 g
ボリエチレンクリコール6000【日本油脂社製】	0.2 g
精製水	80.5 g
1%ヒアルロン酸ナトリウム【日光ケミカルズ社製】	5.0 g

(調製法)

油相成分および水相成分をそれぞれ80℃に熱して均一にし、水相を油相に攪拌しながら加え、乳液を得た。

【0075】

実施例3 クリームの調製

(油相成分)

スクラン【日光ケミカルズ社製】	5.0 g
オリーブ油【日光ケミカルズ社製】	3.0 g
水添ラリシン【野田ワックス社製】	2.0 g
ミツロウ【野田ワックス社製】	2.5 g
モノグリセリルステアレート【日光ケミカルズ社製】	2.0 g
ボリオキシエチレンステアリルエーテル【中外貿易社製】	2.5 g
プロピルバラヘン【上野製薬社製】	1.5 g
L,3-フチレンクリコール【協和発酵工業株式会社製】	5.0 g
香料【d1-ロース・オキサト、木村産業社製】	微量

(水相成分)

N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-フロリン【協和発酵工業株式会社製】	5.0 g
メチルバラヘン【上野製薬社製】	0.5 g
カーボール940【グットリッチ社製】	0.03 g
トリエタノールアミン【国産化学社製】	0.3 g

精製水

70.97g

(調製法)

油相成分および水相成分をそれぞれ80℃に熱して均一にし、水相を油相に攪拌しながら加え、乳化後冷却しクリームを得た。

【0076】

実施例4 美容液の調製

(油相成分)

コレステリルエーテル【日本エマルジョン社製】	0.2g
ビロクルタミン酸エーテル【日本エマルジョン社製】	1.0g
ラノリン【野田ワックス社製】	0.3g
1,3-ブチレングリコール【協和発酵工業株式会社製】	5.0g
香料【ケラニオール、木村産業社製】	微量

(水相成分)

N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-フロリン【協和発酵工業株式会社製】	5.0g
1%カーボホール【中外貿易社製】	5.0g
コントロイチン硫酸ナトリウム【岩瀬コスファ社製】	0.02g
エタノール【日本アルコール社製】	1.0g
メチルバラベン【上野製薬社製】	0.1g
1%ヒアルロン酸【日光ケミカルズ社製】	8.0g
0.3%アテロコラーゲン【株式会社高研社製】	1.0g
精製水	73.38g

(調製法)

油相成分および水相成分をそれぞれ80℃に熱して均一にし、水相を油相に攪拌しながら、美容液を得た。

【0077】

実施例5 整肌パウダーの調製

N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-フロリン【協和発酵工業株式会社製】	5.0g
メチルバラベン【上野製薬社製】	0.5g
アラビアコム【岩瀬コスファ社製】	0.03g

クエン酸【和光純薬工業社製】	0.3g
クエン酸ナトリウム【和光純薬工業社製】	0.2g
マンニット【岩瀬コスファ社製】	適量

(調製法)

各成分を均一にし、攪拌混合して、パウダーを得た。

【0078】

実施例6 軟膏の調製

(油相成分)

白色ワセリン【岩瀬コスファ社製】	0.2g
ステアリルアルコール【日光ケミカルズ社製】	1.0g
ラウリル硫酸ナトリウム【岩瀬コスファ社製】	0.3g

(水相成分)

N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-フロリン【協和発酵工業株式会社製】	5.0g
フロビレンクリコール【和光純薬工業社製】	5.0g
バラオキシ安息香酸エチル【上野製薬社製】	0.02g
バラオキシ安息香酸ブチル【上野製薬社製】	1.0g
精製水	81.45g

(調製法)

相成分および水相成分をそれぞれ80℃に熱して均一にし、水相を油相に攪拌しながら、乳化後冷却し軟膏を得た。

【0079】

実施例7 パックの調製

(油相成分)

エタノール【日本アルコール社製】	8.0g
ボリオキシエチレンオレイルエーテル【日光ケミカルズ社製】	1.0g
バラオキシ安息香酸メチル	0.2g

(水相成分)

N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-フロリン【協和発酵工業株式会社製】	5.0g
フロビレンクリコール	4.0g

グリセリン【協和醸酵工業社製】	5.0 g
ボリビニルアルコール【信越化学工業社製】	15.0 g
精製水	61.6 g
香料【ケ'ラニオール、木村産業社製】	0.2 g

(調製法)

水相成分、油相成分およびそれぞれ80℃に熱して均一にし、水相を油相に攪拌しながら、パックを得た。

【0080】

実施例8 テープ剤の調製

(粘着剤溶剤)

スチレン-イソブチレン-ステンチレンフロック共重合体【シェル社製】	7.0 g
エステルガム【大日本インキ化学社製】	25.0 g
イソブチレンゴム【クレ社製】	5.0 g
トルエン【岩瀬コスファ社製】	15.0 g
酢酸エチル【キシタ化学社製】	14.2 g
ヘキサン【キシタ化学社製】	25.0 g

(薬効成分)

N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン【協和発酵工業株式会社製】	3.0 g
イタリール【日本アルコール社製】	5.0 g

(経皮吸収促進剤)

カレインアルコール【岩瀬コスファ社製】	0.8 g
---------------------	-------

(調製法)

粘着剤溶剤、薬効成分をそれぞれ均一にし、薬効成分、経皮吸収促進剤を粘着剤溶剤に加え、室温で攪拌し組成物を得た。この組成物をシリコーン処理したポリエスルフィルム上に延展し、120℃で乾燥させ冷却後、ポリエチレンフィルムへ粘着剤層を転写させ、テープ剤を得た。

【0081】

試験例1 ヘアレスマウスにおける表皮セラミド合成量の評価

N-アセチルトランス-4-ヒドロキシ-L-プロリンをそれぞれ0、1

. 0、3.0、5.0、10.0重量%含有する30重量%エタノール水溶液を調製し試験組成物1～5を得た。本水溶液のpHは、水酸化ナトリウムでpH4.5に調整した。

【0082】

ヘアレスマウス (SKH1:hr/hr:BR, 雄, 7週令, チャールスリバー社製) に、1日1回、1ヶ月間、被検部位である背部全面に上記試験組成物1～5を200μlずつ塗布した。マウスは各群4匹ずつ用いた。

塗布を開始する前、および塗布を開始してから1ヶ月後に、各マウスの被検部位である背部全面より表皮脂質を抽出し、セラミド含量を測定し、N-アセチルトランヌー4-ヒドロキシ-L-プロリンのセラミド合成能を評価した。

【0083】

表皮脂質は95%エタノールで抽出し、これをさらにヘキサン：メタノール(2:3)で抽出し乾固させて取得した。得られた表皮脂質をクロロホルムに溶解し、芋川ら [ジャーナル・オブ・デルマトロジー (Journal of Investigative Dermatology), 96, 523 (1991)] 方法に準じて、シリカゲル薄層クロマトグラフィーにて分離後、フライングスポットスキャニングデンシトメーター (島津製作所社製、CS-9000) でセラミド含量を測定した。

【0084】

セラミド含量は、無処理のマウスのセラミド合成量変化に対する相対値として、下記、式1に従って算出した。

【0085】

【式1】

$$\text{相対セラミド合成量(%)} = [(A_2 \times B_1) / (A_1 \times B_2)] \times 100$$

A1 : 被検マウスの塗布後セラミド含量

A2 : 被検マウスの塗布前セラミド含量

B1 : 無処理マウスの塗布後セラミド含量

B2 : 無処理マウスの塗布前セラミド含量

【0086】

セラミドには数種の異性体が存在することが知られており、総セラミド合成量

および各種セラミド合成量に分別して算出した。標準品はシグマ社製のセラミドIII (ceramide III、セラミド1および2からなる。) およびセラミドIV (ceramide IV、セラミド4および5からなる。) を用いた。ここで総セラミドとはセラミド1、2、4および5の合計を意味し、セラミドIIIとはセラミド1および2の合計を意味する。なお、セラミド1、2、4および5は、それぞれジャーナル・オブ・リピッド・リサーチ, 24, 559 (1983) の第2図に記載されている化合物1、2、4および5に対応する。

【0087】

結果を第1表および第2表に示す。

【0088】

【表1】

第1表

N-アセチル-トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン濃度 (%)	相対総セラミド合成量 (%)
0	111.1
1	218.6
3	170.6

【0089】

【表2】

第2表

N-アセチル-トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン濃度 (重量%)	相対セラミドIII合成量 (%)
0	126.4
1	239.5
3	321.1
5	209.6
10	185.9

【0090】

長期連用により、N-アセチル-トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン濃度1～3重量%で表皮角質層における総セラミド含量並びにN-アセチル-トランス-4-ヒドロキシ-L-プロリン濃度1～10重量%でセラミドIIIの顯著

な増加が認められた。

以上、本発明のセラミド合成促進剤は、表皮角質層中のセラミド合成を促進する機能を有することから、皮膚バリアー機能を改善することによって荒れ肌やアトピー性皮膚炎などの皮膚疾患の改善に有効である。

【0091】

【発明の効果】

本発明により、皮膚のセラミド生合成能を高め、荒れ肌やアトピー性皮膚炎などの皮膚疾患の改善に有効なヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル誘導体またはそのこれら塩を有効成分として含有する皮膚表皮セラミド合成促進剤を提供することができる。

【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 皮膚表皮角質層におけるセラミド合成を促進し、皮膚バリアー機能を改善し、荒れ肌改善やアトピー性皮膚炎などの皮膚疾患の予防または改善に効果を有する安全なセラミド合成促進剤および該セラミド合成促進剤を含有する化粧料を提供する。

【解決手段】 ヒドロキシプロリンもしくはヒドロキシプロリンのN-アシル化誘導体またはその塩を有効成分として含有する皮膚表皮セラミド合成促進剤、皮膚表皮バリアー機能改善剤およびアトピー性皮膚炎の予防または改善剤並びに該皮膚表皮セラミド合成促進剤を含有する皮膚バリアー機能改善またはアトピー性皮膚炎の改善のための化粧料。

【選択図】 なし

出願人履歴

000001029

19900806

新規登録

東京都千代田区大手町1丁目6番1号

協和醸酵工業株式会社